



都立のど直下で農業を実践する！！

学校法人八紘学園北海道農業専門学校

校長 河田 啓一郎

1 はじめに（学校の成り立ちの紹介）

本校は昭和五年（一九三〇年）に「海外雄飛を願う若者達のための学校」として札幌市豊平区月寒の地に開学しました。「机の上で理論を学び、実践は現場に行つてから、という農業教育では真の農業人は育たない」という創立者栗林元二郎の考えから、夏場は農場実習主体、冬には講義が主である学校教育を始め、創立八〇年を越えた現在も設立当時から全寮制、実習主体カリキュラムを維持しています。自らの道は自ら切り開くという「自耕自拓」の精神を持った実践力のある人材の育成を目指しています。

2 次世代の農業の担い手育成への取り組み

現在は一学年の定員が三五名と少数ながらも、全国から学生が集う道内唯一の二年制の農業専門学校です。在学生の約三割が将来的に実家に就農する予定の後継者であり、その他は農業関係企業、法人などに就職していきます。青年海外協力隊などに参加するための技術を身につけたいという目的で入学する学生もいるので、卒業後に海外で働いたり実習に行ったりする学生もいます。

学園には大きく分けて園芸コースと畜産コースがあり、学生は一年次に全ての分野を幅広く体験実習し、二年次から専攻を決めてシーズンを通した作業の流れを身につけます。特に五月から九月末までは始業時間を朝五時とし作物や家畜の生理に合わせた管理を体験します。

花き科、野菜科、果樹科がある園芸コースでは、生産から販売を経て経営へと繋げていく実習を行っていくことを目標としています。野菜や果樹などの経営においては、販売ルートや顧客を確保し、生産物を有利な条件で安定的に販売することはとても重要です。

そのためには安値で売り切ってしまうのではなく、より高い価格であつても納得して買っていただける消費者の声と、その価値が無いと判断された時の厳しい声をも生で聴くこと

のできる環境で、一シーズンを通した体験をさせています。その中で学生には、商品である農産物を届ける相手が見えることで培われる責任感と、より良いものを作っていく喜びを得ていってほしいと願っています。

販売実習ばかりではなく、七月には花菖蒲園を開園し、ガーデンの維持管理、運営の実際も学びます。花菖蒲の満開を待つて、七月中旬にはヘメロカリスやラベンダーも開花し、花菖蒲園を盛り上げていきます。この一大イベントのさなか、牧草の一番草の収穫が始まり、野菜の直売所を彩るトマトやキュウリの収穫も始まります。秋の収穫に向けたリンゴの摘花、摘果も忙しくなってきました。

この収穫して販売に到るまでのプロセスをより良いものとするために、夏場の農機の操作実習から施設の温度管理や栽培管理などまで積極的に体験させ、冬期間に教室で学ぶ理論、体系の理解に繋げていきます。

畜産コースは札幌と日高に分かれ、搾乳が中心の札幌畜産科と、乳牛の育成、和牛、ポニーなど幅広く行っている日高畜産科があります。そして、この双方で飼料作物の生産を行っている耕作機械科があります。また敷地内で育てている乳牛の搾りたて生乳を原料とした牛乳やヨーグルト、ソフトクリームなどの加工品の製造販売を行う事業部も設置しており、農産加工の基礎も学べます。その乳製品の品質と味は、

都会にありながら散策も出来る牧歌的な環境もあって高い評価を得ています。

3 園芸コース 野菜科

一シーズンの中で種まきから収穫までの一サイクルを完結できる野菜科では、4haの農場で三〇品目ほどの野菜を栽培しています。年間計画に基づき二年生が日々の作業計画をたてて、一年生を指導しつつ、「一作自分で作ったことがある」という自信に繋がる実習を行います。

敷地内の農産物は直売所別棟で販売されます。

学生たちが育てた野菜は、ゴールデンウィーク明けから一〇月までの月・水・金曜日、



早朝から収穫し商品としての荷造りを間に合わせて、消費者と直に接しながら、販売の難しさや可能性を肌で感じています。

4 園芸コース 花き科

花き科では、花きの栽培から販売までの基本的な知識や管理技術を総合的に学びます。特にこだわっているのは、寒冷

地の特性を生かした生産・管理技術の習得ですが、その他にも、北国で育てやすく美しい八紘学園オリジナル品種の花を作出して行くことも、貴重な実習内容となります。

現在は、種苗会社とタイアップして、八紘学園で誕生したクリスマス

ローズ「チェリツシユシリーズ」五色の商標登録を済ませ、市場に流通させており、今後も花色を増やしていく予定です。また、耐寒性のある原種などを親として札幌でも屋外で越冬するフクシアを交配して育成し、将来的には品種登録を目指しています。

このように、花き科では栽培管理技術を学ぶのみならず、新品種育成から商標登録・種苗登録にいたるまでのプロセスにも学生が参画出来ます。

七月に見ごろを迎える花菖蒲園は、札幌の初夏の代名詞のひとつとも言われています。約2haほどの園地に約四五〇種類、一〇万株の花菖蒲が咲き誇ります。学園生まれのオリジナル品種や、江戸時代に作られた古種と呼ばれる種類も多く保存しており、一般に公開しています。

この花菖蒲園も学生の農業実習の一環です。さまざまな質問にもしっかり答えられるよう準備して、開園日を迎えます。少しでもよい状態を見せるために早朝から花柄摘みをしたり、直売所で販売する各種花苗の管理やPOP広告作りなどの準備も学生が行います。

5 園芸コース 果樹科

北海道で唯一、実習を通して果樹の生産技術を学べる本校



の果樹科では、リンゴを中心にブルーンやナシなど北海道の気候にあつた果樹を約二、〇〇〇本植栽しています。学生は高品質の果実の生産技術を、一年間の管理を通して学びます。明治初期に始まった北海道での果樹栽培。札幌市豊平区でも明治時代以降リンゴの栽培が盛んでしたが、街の発展とともに果樹園は姿を消し、今は八紘学園を残すのみ。学園では一九三五年（昭和一〇年）ごろに笹やぶを切り開いてリンゴの苗木を植栽して以来、今日まで学生たちの力で毎年花を咲かせ、たくさんの果実を実らせてきました。現在はリンゴだけでなく二四品種、約一、二〇〇本を管理しています。

6 畜産コース 札幌畜産科

現在、札幌農場で飼養している乳牛は全てホルスタインで約六〇頭、そのうち約四〇頭が搾乳牛です。搾乳は毎日二回、学生が中心となって早朝と夕方に行います。

一日に何度も尻尾洗いやブラッシング、舎内清掃を繰り返して、搾乳作業では丁寧に乳房のふき取りを行うなど徹底した衛生管理を目指しています。搾った生乳の一部は、自家プラントで低温殺菌して製造する「ツキサップ牛乳」として販売されています。学生には、生乳の扱いは生鮮食品と同じと教え、製品への責任を強く持つことを意識させます。

長命で連産性の高い牛を育てることも目標の一つで、そのため体型の改良にも力を入れています。共進会では近年、上



位入賞が少ないのですが、飼料生産を担当する耕作機械科と共に良い草作りから見直しを行っており、再び強い「八紘の牛」を目指しています。

7 畜産コース 日高畜産科

札幌が繋ぎ牛舎での搾乳牛の管理が中心の実習を行っているのに対し日高畜産科

では、フリーストール牛舎で育成牛の管理とバイオベット方式を採用した牛舎での和牛の繁殖を中心とした実習を行っています。また、日本で最初にポニーを導入した歴史のある本校では、現在僅か一頭となりましたがその管理、育成も実習の中を含めています。



8 畜産コース 耕作機械科

札幌の農場の敷地内には約一二haの牧草地があり、八haのデントコーンの生産も行っています。このほか日高にもある五一haの牧草と、四haのデントコーンの生産を一手に管理するのが耕作機械科です。



入学して初めてア
クセルを踏んだとい
う学生もいるなか、
一年生には機械に対
しての心構えを身に
付け、農業機械を事
故なく安全に操作す
るための基本の修得
を目標とし、二年生
には、良質な飼料生
産の為に必要な栽培
管理や機械の点検整
備、操作技術をくり
返し指導しています。

9 今後の課題と展望

農業者人口の低下と後継者不足、四年生大学の定員割れなどが問題となっているなか、本校も入学希望者数や学生における後継者の割合の低下が顕著です。それに反比例して、道内のみならず九州からも「農場の現場でマネージャーとして将来働ける人材」を推薦して欲しいという求人が増えています。また、新規就農を目指す若者を求める声や、農業系企業において実際の現場の経験も持った即戦力の期待も大きくなっています。

若者のコミュニケーション能力の低下も指摘される中、全寮制での日々の生活では、否応なく自分なりに周囲との安定した距離感を作れる能力も磨くことが出来ます。古い教育方式を維持し続けていくことは、現代社会に於ける課題への対応策の一つにもなりうると思っています。

教育の課題としては、年々生産現場の技術が目覚ましく進歩し、また農業機械の大型化も進み、時代のどこに合わせた教育を行って行くことが社会により貢献できる人材の輩出につながるののかの見極めが難しい時代となっています。今後、社会に沿わせながらも後追いしない本質的な教育とはどういうものなのかを模索し続けて参ります。